

当たり前にあるものを守ること

青山 真美

西九州大学リハビリテーション学部
リハビリテーション学科作業療法学専攻

田んぼの向こうに背振山系が見渡せる家に住むことに決めた。あれから6年、我が家の前の田んぼが消えて、家の建設ラッシュ。「朝、背振山系を眺めてコーヒーを飲む・・・」私の日常の一コマが消えた。何だかストレス・・・。

今、私は、自然環境問題に関心を持っている。そして、自然環境は健康とウェルビーイングに深く関係していると思っている。私がこの問題に興味を抱く背景となったのは、大学院で人類学を学び「連続と絶滅」という言葉に出会ったことに遡る。私たち人類は、700万年という長い時間、変化する環境に適応できる文化を発展させ、脈々と命をつないできた。一方、この間、命をつなぐことができず絶滅したネアンデルタール人などの多くの人類がいた。この絶滅の事実を知ったことで、私たち人類の生存も当たり前のことではないという危機感を無意識に感じとっていたのだと思う。時が流れ、1つのグラフに出会った。40万年前から2001年までの「南極における二酸化炭素濃度変化」を示したものだ。二酸化炭素濃度は、近年になるまでの40万年間、一定の範囲を上下していた。しかし、2001年の濃度は一定の範囲から外れた値を示していた。そして、「最近50年間の温暖化は人間活動に起因する」と記されていた。この時、私の興味を強く引いたのは「人間活動に起因」という言葉だった。「人間活動とは人間の作業のことか?」「人間の作業が原因で温暖化が進行しているということか?」「地球温暖化を含む自然環境問題と作業は関係しているということか?」「作業科学は自然環境問題に貢献できるのではないか?」と。その後、アイヌの世界観や生態系サービスといった概念と出会い、自然環境が人々の健康と生活に多くの恩恵を与えていることを知った。2009年、医療人類学者であるメルル・シンガーに「もし、川上から人が流れてきたとしても、作業療法士は、その人の手当をするが、なぜ、川上から人が流れてきたか、そこで何が起きているかについては考えない」と指摘された。そして、2011年3月、東日本大震災と福島第一原発爆発事故が起こった。個人の健康やウェルビーイングに対して、自然や社会の環境要因の影響が非常に大きいことを痛感する出来事だった。3.11以降、水俣病事件を学び始めた。水俣病事件は、自然環境の破壊が、生活の場、肉親、命と健康、自尊心、日々の作業、コミュニティなど、日常当たり前にあるものを奪うことを教えてくれる。また、当たり前にあった自然環境を破壊し、多くの犠牲者を生んだ原因とその原因をつくりだす背景となった社会の仕組みも知ることができる。そして、この事件は、人の健康と生活の前提となる豊かな自然、人権、平和を守る責任は誰にあるかをも問いつづけている。

WFOTの声明書「ENVIRONMENTAL SUSTAINABILITY SUSTAINABLE PRACTICE WITHIN OCCUPATIONAL THERAPY (環境持続性のための作業療法実践)」の作成に参加し、2012年3月に採択された。2014年のWFOT横浜大会では、ワークショップ「Building Sustainable Practice Within Occupational Therapy (環境持続性のための作業療法実践にむけて)」を開催し、指針の作成と環境教育教材開発にむけた第一歩を踏み出す。1987年、「持続可能な発展」の概念が定義され、現在では基本的な共通理念として、国際的に広く認識されている。そして、各国、様々な団体や企業、学問領域において「持続可能な社会の実現」を目指す取り組みが進められている。作業科学、作業療法学においても、ようやく、個人にとって意味があり、かつ、今は当たり前にある自然や平和を守ることのできる作業を選び、行うこと、すなわち、「意味ある持続可能な作業の可能化」により、健康とウェルビーイングの促進を目指す挑戦が始まった。